

週日の説教

金 大烈 神父 2009年5月12日(火)

《傷をどのように消化していますか》

四旬節の黙想会の指導をなさったマルセリーノ神父様のお話を読んでみました。意味深い素晴らしい内容でした。皆様も黙想会に与られたと思います。その話の内容は、赦しが中心になっていました。それを読んで、そして今日の福音を読んで、思い出したことを皆様と分かち合いたいと思います。

皆様の子どもが、ある日傷を受けたとしましょう。その時、親の立場として、子どもにどのように言うべきでしょうか。そういうことは忘れるように言うべきでしょうか。きちんと覚えていて絶対忘れないように言うべきでしょうか。もう一度言います。傷というのは忘れるべきものでしょうか。それともきちんと覚えているべきものでしょうか。

私たちは、母親のお腹にいるときからずっと傷を受けながら、今までこの世の中に生きています。そしてこれからもいろいろな傷を受けます。反対に、私たちからたくさんの人に傷をつけることもあります。皆様から傷を受けた人もたくさんいると思います。

傷は、忘れるべきものでしょうか。覚えているべきものでしょうか。

傷というものは忘れようとしても絶対忘れられません。もちろん重さ・大きさ・深さによって傷にもいろいろな種類がありますが、"これは傷だ"と言えるくらいの傷は、忘れようとしても絶対忘れられません。

それならば、どうしたらよいのでしょうか。傷というものは、忘れるか、覚えておくかの問題ではなくて、自分が間違えてついた傷なのか、相手が間違えて自分につけた傷なのかを考えてほしいのです。自分が間違えてつけた傷ならば、それはある意味でありがたいことです。それには悔しさも恨みも生じるはずはありません。"間違えてこのようなことをしたけれど、もう二度とこのようなことはしない"という心が生じたら、それは幸いです。相手がつけた傷の場合はどうでしょうか。たぶんほとんどの傷が、この場合に属していると思います。だいたい、相手が傷をつけたと思うのが皆様の心の働きだと思います。だから、悔しさ、恨み、憎しみ、そういうものがいつも生じます。相手の名前を思い出しただけで腹が立ち、自分をコントロールするのがものすごく難しくなります。

皆様、今日の福音(ヨハネ 14:27 - 31a)の中でイエス様は、「私があなたがたに与える平和は、世があなたがたに与えるようなものとは違う」とはっきりおっしゃっています。結局、人間の世の中は、「あの人が私に傷を与えたから、それを何とかして返さなければならない」、という論理によって流れています。しかし、イエス様がおっしゃった平和は、世の平和とは少し違うようです。相手の間違えて一方的に受けた傷ならば、イエス様の目が必要です。哀れみ深い、憐憫の目です。「あの人は、なぜそのようなことをしてしまったのか、気の毒だ。」「なぜそのような生き方をしているのか。」というように、恨みではなくて気の毒に思う余裕のある心で見れば、傷は傷として残らなくなります。そして、「同じことを私も他の人にするかもしれないが、できれば絶対したくない。」「全てのことをわかっていらっしゃる神様をご覧になっているから私は心配しない。」「これも一つの勉強であり、私が成熟するためのステップになる。」という心ができれば、たぶん過去の傷に縛られることからある程度解放されるのではないのでしょうか。

皆様、傷というものには必ず意味があります。それがよい傷か悪い傷かを判断するのは、自分がどのように消化するかにかかっています。傷を乗り越えて立派な人になった人もたくさんいるし、傷に縛られていつもつまずき、いつも不幸な鈍い顔をして生きている人もいます。そして、何かあればすぐに"怖い" "嫌だ" という反応を見せます。結局、"怖い"、"嫌だ" という反応は子どもです。こういうことをよく意識しましょう。

これから、私たちが相手に傷を与える機会も結構与えられると思います。その時、「私によってこの人がつまずいたらどうするか。」と思い、我慢をしてください。言わなければならないことは、相手を理解させながら伝えてください。感情的な振る舞いや言い方は、マイナスになるだけで、何の意味もありません。

皆様、結局私たちはみんな傷を持っています。ただ、その傷に縛られるか、その傷は自分のためによく役に立ったと理解するのかによって、ぜんぜん違う結果を出すのを考えましょう。

イエス様も傷を受けました。生まれる前から亡くなるまで、全ての人々に裏切られながらいつも「その傷を与えた者を愛しなさい」と叫んでいます。私たちもその深いみ旨を量ろうとする心で、日常出会う人々に慎重に、寛大な心で接することが一番必要ではないかと思ってみました。

ありがとうございました。